

# はじめに

本書は『クロスセクショナル統計学シリーズ』の1冊で、社会調査データを用いた計量研究を行うための統計手法についての入門書である。本書の特徴は、① 実際の社会調査データを用いて、分析手法だけでなく、結果の解釈の仕方についても説明している点、② 各分析手法について、無料のソフトウェアであるRを用いた分析の方法を解説している点、③ 練習問題や参考文献によって、自分で知識を身につけることができるようにした点にある。15章立ての構成は、大学での半期の授業で扱う内容、特に、社会調査士資格認定のE科目で扱う内容を念頭においている。しかし、各章を読み、実際にRを使って自分自身で勉強を進めても、社会調査データを用いた分析を行うための一通りの知識を身につけることができるように構成されている。

本書では行動科学や社会学における題材を用いて、社会調査データの分析法を説明する。このため、分析モデルや分析結果の解釈もこれらの学問分野を背景としている。一方で本書では、データの基本的な見方や、平均・分散といった記述統計量からマルチレベル分析といった最新の分析手法まで、さまざまな学問分野で用いることのできる手法を網羅的に扱う。よって、行動科学や社会学を専門としない方にも、社会調査データ分析の入門書としてご活用いただける。

近年では、東京大学のSSJデータアーカイブや立教大学の社会調査データアーカイブRUDA、海外ではドイツのGESISなど、データアーカイブを通じた社会調査データの収集・保管・公開が進められている。また、本書で使用したRをはじめ、無料で使用できる統計分析のツールもある。大規模な社会調査データを用いた分析を行う可能性は、格段に広がっているといえるだろう。

他方で、心理学や政治学、経済学と比べると、社会調査のデータを用いた統計分析について書いた網羅的な入門書は必ずしも多くはない。本書を通じ、無

料のソフトウェアによる社会調査データの分析方法を学ぶことで、この可能性を多くの方に生かしていただければと思う。

本書が想定する第一の読者は、卒業論文で社会調査データの統計分析を行いたい大学生や、これから統計を用いた社会調査データの分析を行ってみたいと思っている研究者である。一方で各章では、基本的な分析手法の知識がある人にとっても活用できるよう、平均の検定における等分散性をめぐる議論（第6章）、回帰分析における媒介効果の検定や頑健標準誤差の考え方（第11章）、マルチレベル分析（第15章）など、発展的な知識にも触れている。ただし、初学者向けに、網羅的に分析手法の解説を行うことを重視したため、各分析手法についての詳しい内容が知りたい場合は、各章に挙げた参考文献を参照してほしい。

最後に、東北学院大学の神林博史先生と東北大学文学研究科博士後期課程（日本学術振興会）の毛塚和宏さんには、執筆当初から本書の内容について、多岐にわたるコメントをいただいた。特に毛塚さんには、細かい数式や書式、わかりやすい図の作成から、数学的な解説の部分まで、多大な貢献をいただいている。お二人がいなければ、本書は完成しなかっただろう。深い感謝の意を表したい。また、査読を引き受けていただき、内容の改善に向けた指摘をいただいた東京大学の藤原 翔さんに、心から感謝申し上げる。最後に、『クロスセクショナル統計シリーズ』編集委員の皆様と共立出版の山内千尋さんは、執筆が遅れただけでなく、当初の企画の内容から外れてしまった本書を許容していただき、改善に向けた方向づけを行ってくださった。記して感謝したい。なお、いただいた指摘に十分に対応できていない点もあり、そのために至らない箇所があるのはすべて筆者の能力不足によるものである。本書が統計分析をやってみたいと思う方の助けになれば筆者にとっての何よりの喜びである。本書を通じて、多くの方が公開された社会調査データを活用した分析を行い、社会についての理解を深めるような研究が広がっていくことを願っている。